

カイロ団長

宮沢賢治

あるとき、三十疋びきのあまがえるが、一緒いっしょに面白おもしろく仕事をやって居おりました。

これは主に虫仲間からたのまれて、紫蘇しその実やけしの実をひろつて来て花ばたけをこしらえたり、かたちのいい石いしや苔こけを集めて来て立派りっぱなお庭をつくったりする職業しやうがいでした。

こんなようにして出来たきれいなお庭を、私どもはたびたび、あちこちで見ます。それは畑まめの豆まめの木の下や、林ならの榎えの木の根もとや、又また雨垂あまだれの石のかげなどに、それはそれは上手かあいに可愛らしくつくつてあるのです。

さて三十疋は、毎日大へん面白くやっていました。朝は、黄金色きんいろのお日さまの光が、とうもろこしの影法師かげぼうしを二千六百寸も遠くへ投げ出すところからさっぱりした空気をすばすば吸って働き出し、

あめいろ

夕方は、お日さまの光が木や草の緑を飴色にうきうきさせるまで歌ったり笑ったり叫んだりして仕事をしました。殊にあらしの次の日などは、あっちからもこっちからもどうか早く来てお庭をかくしてしまつた板を起して下さいとか、うちのすぎごけの木が倒れましたから大いそぎで五六人来てみて下さいとか、それはそれはいそがしいのでした。いそがしいほど、みんなは自分たちが立派な人になつたような気がして、もう大よろこびでした。さあ、それ、しっかりひっぱれ、いいか、よいとこしよ、おい、ブチュコ、縄がたるむよ、いいとも、そらひっぱれ、おい、おい、ビキコ、そこをはなせ、縄を結んで呉れ、よういやさ、そろもういいき、よおいやしや、なんてまあこんな工合です。

ところがある日三十疋のあまがえるが、蟻の公園地をすつかり

仕上げて、みんなよろこんで一まず本部へ引きあげる途中で、一本の桃ももの木の下のを通りますと、そこへ新らしい店が一軒けん出ていました。そして看板がかかって、

「舶来はくらいウエスキイ 一杯ばい、二厘半りん。」と書いてありました。

あまがえるは珍めづらしいものですから、ぞろぞろ店の中へはいって行きました。すると店にはうすぐろいとのおさまがえるが、のっそりとすわって退くつそうにひとりでもべろ舌を出して遊んでいましたが、みんなの来たのを見て途方もないいい声で云いいました。

「へい、いらっしやい。みなさん。一寸ちよつとおやすみなさい。」

「なんですか。舶来のウエクーというものがあるそうですね。どんなもんですか。ためしに一杯の吞のませて下さいませんか。」

「へい、舶来のウエスキイですか。一杯二厘半ですよ。ようござ

んすか。」

「ええ、よござんす。」

とのさまがえるは粟^{あわ}つぶをくり抜^ぬいたコップにその強いお酒を汲^くんで出しました。

「ウーイ。これはどうもひどいもんだ。腹がやけるようだ。ウーイ。おい、みんな、これはきたいなもんだよ。咽喉^{のど}へはいると急に熱くなるんだ。ああ、いい気分だ。もう一杯下さいませんか。」

「はいはい。こちらが一ぺんすんでからさしあげます。」

「こっちへも早く下さい。」

「はいはい。お声の順にさしあげます。さあ、これはあなた。」

「いやありがとう、ウーイ。ウフツ、ウウ、どうもうまいもんだ。」

「こっちへも早く下さい。」

「はい、これはあなたです。」

「ウウイ。」

「おいもう一杯お呉れ。」

「こつちへ早くよ。」

「もう一杯早く。」

「へい、へい。どうぞお急せきにならないで下さい。折角せつかく、はかつたのがこぼれますから。へいと、これはあなた。」

「いや、ありがとう、ウーイ、ケホン、ケホン、ウーイうまいね。どうも。」

さてこんな工合で、あまがえるはお代りお代りで、沢山たくさんお酒を呑みましたが、呑めば呑むほどもっと呑みたくなります。

もつとも、とのさまがえるのウイスキーは、石油缶かんに一ぱいあ

りましたから、粟つぶをくりぬいたコップで一万べんはかつて、一分もへりはしませんでした。

「おいもう一杯おくれ。」

「も一杯お呉れつたらよう。早くよう。」

「さあ、早くお呉れよう。」

「へいへい。あなたさまはもう二百二杯目でございますがよろしゅうございますか。」

「いいよう。お呉れつたらお呉れよう。」

「へいへい。よければさし上げます。さあ、」

「ウーイ、うまい。」

「おい、早くこっちへもお呉れ。」

そのうちにあまがえるは、だんだん酔よい酔がまわって来て、あつちで

もこつちでも、キーイキーイといびきをかいて寝^ねてしまいました。
とのさまがえるはそこでにやりと笑って、いそいですっかり店
をしめて、お酒の石油缶にはきちんと蓋^{ふた}をしてしまいました。そ
れから戸棚^{とだな}からくさりかたびらを出して、頭から顔から足のさき
までちゃんと着^き込んでしまいました。

それからテーブルと椅子^{いす}をもつて来て、きちんとすわり込みま
した。あまがえるはみんな、キーイキーイといびきをかいていま
す。とのさまがえるはそこで小さなこしかけを一つ持って来て、
自分の椅子の向う側に置きました。

それから棚から鉄の棒をおろして来て椅子へどっかかり座^{すわ}って一
ばんはじのあまがえるの緑色のあたまをこつんとたたきました。

「おい。起きな。勘定^{かんじょう}を払^{はら}うんだよ。さあ。」

「キーイ、キーイ、クワア、あ、痛い、誰たれだい。ひとの頭をなぐ撲るやつは。」

「勘定を払いな。」

「あつ、そうそう。勘定はいくらになっていますか。」

「お前のは三百四十二杯で、八十五錢五厘だ。どうだ。払えるか。」
あまがえるは財布さいふを出して見ましたが、三錢二厘しかありません。

「何だい。おまえは三錢二厘しかないのか。呆あきれたやつだ。さあどうするんだ。警察へ届けるよ。」

「許して下さい。許して下さい。」

「いいや、いかん。さあ払え。」

「ないんですよ。許して下さい。そのかわりあなたのけらいにな

りますから。」

「そうか。よかろう。それじゃお前はおれのけらいだぞ。」

「へい。仕方ありません。」

「よし、この中にはいれ。」

とのさまがえるは次の室へやの戸を開いてその閉口したあまがえるを押し込んで、戸をおびたんとしめました。そしてにやりと笑って、又どっしりと椅子へ座りました。それから例の鉄の棒を持ち直して、二番目のあま蛙がえるの緑青ろくしよういろの頭をこつんとたたいて云いました。

「おいおい。起きるんだよ。勘定だ勘定だ。」

「キーイ、キーイ、クワア、ううい。もう一杯お呉れ。」

「何をねぼけてんだよ。起きるんだよ。目をさますんだよ。勘定

だよ。」

「ううい、あああつ。ううい。何だい。なぜひとの頭をたたくだい。」

「いつまでねぼけてんだよ。勘定を払え。勘定を。」

「あつ、そうそう。そうでしたね。いくらになりますか。」

「お前のは六百杯で、一円五十銭だよ。どうだい、それ位あるかい。」

あまがえるはすきとおる位青くなって、財布をひっくりかえして見ましたが、たった一銭二厘しかありませんでした。

「ある位みんな出しますからどうかこれだけに負けて下さい。」

「うん、一円二十銭もあるかい。おや、これはたった一銭二厘じゃないか。あんまり人をばかにするんじゃないぞ。勘定の百分の一に

負けろとはよくも云えたもんだ。外国のことばで云えば、一パーセントに負けて呉れと云うんだろう。人を馬鹿にするなよ。さあ払え。早く払え。」

「だって無いんだもの。」

「なきやおれのけらいになれ。」

「仕方ない。そいじゃそうして下さい。」

「さあ、こっちへ来い。」とのさまがえるはあまがえるを又次の室に追い込みました。それから又どつかりと椅子へかけようとしましたが何か考えついたらしく、いきなりキーキーいびきをかいているあまがえるの方へ進んで行って、かたっぱしからみんなの財布を引っぱり出して中を改めました。どの財布もみんな三錢より下でした。ただ一つ、いかにも大きくふくれたのがありました

が、開いて見ると、お金が一つぶも入っていないで、椿つばきの葉が小さく折って入れてあるだけでした。とのさまがえるは、よろこんで、にこにこにこにこにこ笑って、棒を取り直し、片っぱしからあまがえるの緑色の頭をポンポンポンたたきつけました。さあ、大へん、みんな、

「あ痛つ、あ痛つ。誰だい。」なんて云いながら目をさまして、しばらくきよろきよろきよろしていましたが、いよいよそれが酒屋のおやじのとのさまがえるの仕業しわざだとわかると、もうみな一ぺんに、

「何だい。おやじ。よくもひとをなぐったな。」と云いながら、四方八方から、飛びかかりましたが、何分とのさまがえるは三十がえるりき力あるのですし、くさりかたびらは着ていますし、それにあ

まがえるはみんな舶来ウエスキーでひよろひよろしてますから、片っぱしからストーンストーンと投げつけられました。おしまいにはとのさまがえるは、十一疋のあまがえるを、もじやもじや堅めて、ぺちやんと投げつけました。あまがえるはすっかり恐れ入って、ふるえて、すぎとおる位青くなって、その辺に平伏いたしました。そこでとのさまがえるがおごそかに云いました。

「お前たちはわしの酒を呑んだ。どの勘定も八十錢より下のはない。ところがお前らは五錢より多く持っているやつは一人もない。どうじゃ。誰かあるか。無かろう。うん。」

あまがえるは一同ふうふうと息をついて顔を見合わせるばかりです。とのさまがえるは得意になって又ははじめました。

「どうじゃ。無かろう。あるか。無かろう。そこでお前たちの仲

間は、前に二人お金を払うかわりに、おれのけらいになるというやくそく約束をしたがお前たちはどうじゃ。」この時です、みなさんもご存じの通り向うの室の中の二疋ひきが戸のすきまから目だけ出してキーと低く鳴いたのは。

みんなは顔を見合しました。

「どうも仕方ない。そうしようか。」

「そうお願いしよう。」

「どうかそうお願いいたします。」

どうです。あまがえるなんというものは人のいいものですからすぐとのさまがえるのけらいになりました。そこでとのさまがえるは、うしろの戸をあけて、前の二人を引っ張り出しました。そして一同へおごそかに云いました。

「いいか。この団体はカイロ団ということにしよう。わしはカイロ団長じゃ。あしたからはみんな、おれの命令にしたがうんだぞ。いいか。」

「仕方ありません。」とみんなは答えました。すると、とのさまがえるは立ちあがって、家をぐるっと一まわしまわしました。すると酒屋はたちまちカイロ団長の本宅にかわりました。つまり前には四角だったのが今度は六角形の家になったのですな。

さて、その日は暮^くれて、次の日になりました。お日さまの黄金^{きんいろ}色の光は、うしろの桃の木の影法師^{かげぼうし}を三千寸も遠くまで投げ出し、

空はまっ青にひかりましたが、誰もカイロ団に仕事を頼^{たの}みに来ませんでした。そこでとのさまがえるはみんなを集めて云いました。

「さっぱり誰も仕事を頼みに来んな。どうもこう仕事がなくちゃ、

お前たちを養つておいても仕方ない。俺おれもとうとう飛んだことになつたよ。それにつけても仕事のない時に、いそがしい時の仕度したくをして置くことが、最必要だ。つまりその仕事の材料を、こんな時に集めて置かないといかん。ついてはまず第一が木だがな。今日はみんな出て行つて立派な木を十本だけ、十本じゃすくない、ええと、百本、百本でもすくないな、千本だけ集めて来い。もし千本集まらなかつたらすぐ警察へ訴うえるぞ。貴様らはみんな死刑しけいになるぞ。その太い首をスポンと切られるぞ。首が太いからスポンとはいかない、シュツポオンと切られるぞ。」

あまがえるどもは緑色の手足をぶるぶるつとけいれんさせました。そしてこそそこそこそ、逃にげるようにおもてに出てひとりひとりが三十三本三分三厘強ずつという見当で、一生けん命いい木

をさがしましたが、大体もう前々からさがす位さがしてしまつていたのですから、いくらそこらをみんながひよいひよいかけまわつても、夕方までにたつた九本しか見つかりませんでした。さあ、あまがえるはみんな泣き顔になつて、うろろうろやりましたがますますどうもいけません。そこへ丁度一ぴきの蟻ありが通りかかりました。そしてみんなが飴色あめいろの夕日にまっ青にすきとおつて泣いているのを見て驚おどろいてたずねました。

「あまがえるさん。昨日はどうもありがとう。一体どうしたのですか。」

「今日は木を千本、とのさまがえるに持つていかないといけなのです。まだ九本しか見つかりません。」

蟻はこれを聞いて「ケツケツケツケ」と大笑いに笑いはじめま

した。それから申しました。

「千本持つて来いというのなら、千本持つて行ったらいいじゃないませんか。そら、そこにあるそのけむりのようなかびの木などは、一つかみ五百本にもなるじゃありませんか。」

なるほどみんなはよろこんでそのけむりのようなかびの木を一人が三十三本三分三厘ずつ取って、蟻にお礼を云って、カイロ団長のところへ帰って来ました。すると団長は大機嫌だいきげんです。

「ふんふん。よし、よし。さあ、みんな舶来はくらいウイスキーを一杯いっぱいずつ飲んでやすむんだよ。」

そこでみんなは粟あわつぶのコップで舶来ウイスキーを一杯ずつ飲んで、くらくら、キーイキーイと、ねむってしまいました。

次の朝またお日さまがおのぼりになりますと、とのさまがえる

は云いました。

「おい、みんな。集れ。今日もどこからも仕事をたのみに来ない。いいか、今日はな、あちこち花畑へ出て行つて花の種をひろつて来るんだ。一人が百つぶずつ、いや百つぶではすくない。千つぶずつ、いや、千つぶもこんな日の長い時にあんまり少い。万粒^{つぶ}ずつがいいかな。万粒ずつひろつて来い。いいか、もし、来なかったらすぐお前らを巡査^{じゅんさ}に渡^{わた}すぞ。巡査は首をシュツポンと切るぞ。」

あまがえるどもはみんな、お日さまにまつさおにすきとおりがら、花畑の方へ参りました。ところが丁度^{さといわい}幸に花のたねは雨のようにこぼれていましたし蜂^{はち}もぶんぶん鳴いていましたのであまがえるはみんなしゃがんで一生けん命ひろいました。ひろいながらこんなことを云っていました。

「おい、ビチュコ。一万つぶひろえそうかい。」

「いそがないとだめそうだよ、まだ三百つぶにしかないんだもの。」

「さつき団長が百粒ってはじめてに云ったねい。百つぶならよかったねい。」

「うん。その次に千つぶって云ったねい。千つぶでもよかったねい。」

「ほんとうにねい。おいら、お酒をなぜあんなにのんだろうなあ。」
「おいらもそいつを考えているんだよ。どうも一ぱい目と二杯目、二杯目と三杯目、みんな順ぐりに糸か何かついていたよ。三百五十杯つながって居たとおいら今考えてるんだ。」

「全くだよ。おっと、急がないと大へんだ。」

「そうそう。」

さて、みんなはひろってひろってひろって、夕方までにやつと一万つぶずつあつめて、カイロ団長のところへ帰って来ました。するととのさまがえるのカイロ団長はよろこんで、

「うん。よし。さあ、みんな舶来ウエスキーを一杯ずつのんで寝るんだよ。」と云いました。

あまがえるどもも大よろこびでみんな粟あわのこつぶで舶来ウイスキイを一杯ずつ呑んで、キーイキーイと寝てしまいました。

次の朝あまがえるどもは眼めをさまして見ますと、もう一ぴきのとのさまがえるが来ていて、団長とこんなはなしをしていました。「とにかく大いに盛さかんにやらないといかんね。そうでないと笑いのものになってしまうだけだ。」

「全くだよ。どうだろう、一人前九十円ずつということにしたら。」

「うん。それ位ならまあよからうかな。」

「よからうよ。おや、みんな起きたね、今日は何の仕事させようかな。どうも毎日仕事がなくて困るんだよ。」

「うん。それは大いに同情するね。」

「今日は石を運ばせてやろうか。おい。みんな今日は石を一人で九十^{もんめ}匁ずつ運んで来い。いや、九十匁じゃあまり少いかな。」

「うん。九百貫という方が口調がいいね。」

「そうだ、そうだ。どれだけいいか知れないね。おい、みんな。」

今日は石を一人につき九百貫ずつ運んで来い。もし来なかったら早速警察へ貴様らを引き渡すぞ。ここには裁判の方のお方もお出でになるのだ。首をシュッポオンと切ってしまう位、実にわけな

いはなしだ。」

あまがえるはみなすきとおつてまっ青になつてしまいました。それはその筈はずです。一人九百貫の石なんて、人間でさえ出来るもんじゃありません。ところがあまがえるの目方が何匁あるかと云つたら、たかが八匁か九匁でしょう。それが一日に一人で九百貫の石を運ぶなどはもうみんな考えたただけでめまいを起してクウウ、クウウと鳴つてばかりばかり倒たおれてしまったことは全く無理もありません。

とのさまがえるは早速例の鉄の棒を持ち出してあまがえるの頭をコツンコツンと叩たたいてまわりました。あまがえるはまわりが青くくるくるするように思いながら仕事に出て行きました。お日さまさえ、ずうつと遠くの天の隅すみのあたりで、三角になつてくるり

くるりとうごいているように見えたのです。

みんなは石のある所に来ました。そしててんでに百匁ばかりの石につなをつけて、エンヤラヤア、ホイ、エンヤラヤアホイ。とひっぱりはじめました。みんなあんまり一生けん命だったので、汗が^{あせ}からだ中チクチクチクチク出て、からだはまるでへたへた風のようになり、世界はほとんどまっくらに見えました。とにかくそれでも三十疋が首尾よくめいめいの石をカイロ団長の家まで運んだときはもうおひるになっていました。それにみんなはつかれてふらふらして、目をあいていることも立っていることもできませんでした。あーあ、ところが、これから晩までにもう八百九十九貫九百匁運ばないと首をシュツポオンと切られるのです。

カイロ団長は丁度この時うちの中でいびきをかいて寝て居^おりま

したがやつと目をさまして、ゆつくりと外へ出て見ました。あまがえるどもは、はこんで来た石にこしかけてため息をついたり、土の上に大の字になって寝たりしています。その影法師は青く日がすきとおって地面に美しく落ちていました。団長は怒おこって急いで鉄の棒を取りに家の中にはいりますと、その間に、目をさましていたあまがえるは、寝ていたものをゆり起して、団長が又出て来たときは、もうみんなちゃんと立っていました。カイロ団長が申しました。

「何だ。のろまども。今までかかってたつたこれだけしか運ばないのか。何という貴様らは意気いき地じなしだ。おれなどは石の九百貫やそこら、三十分で運んで見せるぞ。」

「とても私らにはできません。私らはもう死にそうなんです。」

「えい、意気地なしめ。早く運べ。晩までに出来なかったら、みんな警察へやっってしまうぞ。警察ではシュツポンと首を切るぞ。ばかめ。」

あまがえるはみんなやけ糞くそになって叫さけびました。

「どうか早く警察へやって下さい。シュツポン、シュツポンと聞いていると何だか面白いおもしろような気がします。」

カイロ団長は怒って叫び出しました。

「えい、馬鹿者め意気地なしめ。」

えい、ガーアアアアアアア。カイロ団長は何だか変な顔をして口をパタンと閉じました。ところが「ガーアアアアアア」と云う音はまだつづいています。それは全くカイロ団長の咽喉のどから出たものではありませんでした。かの青空高くひびきわたるかた

つむりのメガホーンの声でした。王さまの新らしい命令のさきぶれでした。

「そら、あたらしいご命令だ。」と、あまがえるもとのさまがえるも、急いでしゃんと立ちました。かたつむりの吹くメガホーンの声はいともほがらかにひびきわたりました。

「王さまの新らしいご命令。王さまの新らしいご命令。一個条。ひとに物を云いつける方法。ひとに物を云いつける方法。第一、ひとにものを云いつけるときはそのいいつけられるものの目方で自分のからだの目方を割って答を見つける。第二、云いつける仕事にその答をかける。第三、その仕事を一ぺん自分で二日間やつて見る。以上。その通りやらないものは鳥の国へ引き渡す。」

さああまがえるどもはよろこんだのなんのって、チェツコとい

う算術のうまいかえるなどは、もうすぐ暗算をはじめました。云いつけられるわれわれの目方は拾^{じゅう}匁、云いつける団長のめがたは百匁、百匁割る十匁、答十。仕事は九百貫目、九百貫目掛ける十、答九千貫目。

「九千貫だよ。おい。みんな。」

「団長さん。さあこれから晩までに四千五百貫目、石をひっぱって下さい。」

「さあ王様の命令です。引っぱって下さい。」

今度は、とのさまがえるは、だんだん色がさめて、^{あめいろ}飴色にすきとおって、そしてブルブルふるえて参りました。

あまがえるはみんなでのさまがえるを囲んで、石のある^{ところ}処へ連れて行きました。そして一貫目ばかりある石へ、^{つな}綱を結びつけて

「さあ、これを晩までに四千五百運べばいいのです。」と云いながらカイロ団長の肩に綱のさきを引っかけてやりました。団長もやつと覚悟かくごがきまつたと見えて、持っていた鉄の棒を投げすてて、眼をちゃんときめて、石を運んで行く方角を見定めましたがまだどうも本当に引っぱる気にはなりませんでした。そこであまがえるは声をそろえてはやしてやりました。

「ヨウイト、ヨウイト、ヨウイト、ヨウイトシヨ。」

カイロ団長は、はやしにつりこまれて、五へんばかり足をテクテクふんばってつなを引っ張りましたが、石はびくとも動きません。とのさまがえるはチクチク汗を流して、口をあらんかぎりあけて、フウフウといきをしました。全くあたりがみんなくらくらくして、茶色に見えてしまったのです。

「ヨウイト、ヨウイト、ヨウイト、ヨウイトシヨ。」

とのさまがえるは又四へんばかり足をふんばりましたが、おしまいの時は足がキクツと鳴ってくにやりと曲ってしまいました。あまがえるは思わずどっと笑い出しました。がどう云うわけかそれから急にしいんとなつてしまいました。それはそれはしいんとしてしまいました。みなさん、この時のさびしいことと云ったら私はとても口で云えません。みなさんはおわかりですか。ドツと一緒いっしょに人をあざけり笑つてそれから俄にわかにしいんとなつた時のこのさびしいことです。

ところが丁度その時、又もや青ぞら高く、かたつむりのメガホーンの声がひびきわたりました。

「王様の新らしいご命令。王様の新らしいご命令。すべてあらゆ

るいきものはみんな気のいい、かあいそうなものである。けつして憎にくんではならん。以上。」それから声が又向うの方へ行つて「王様の新らしいご命令。」とひびきわたつて居ります。

そこであまがえるは、みんな走り寄つて、とのさまがえるに水をやったり、曲つた足をなおしてやったり、とんとんせなかをたたいたりいたしました。

とのさまがえるはホロホロ悔悟かいごのなみだをこぼして、

「ああ、みなさん、私がわるかつたのです。私はもうあなた方の団長でもなんでもありません。私はやつぱりただの蛙かえるです。あしたから仕立屋をやります。」

あまがえるは、みんなよろこんで、手をパチパチたたきました。次の日から、あまがえるはもとのように愉快ゆかいにやりはじめま

した。

みなさん。あまあがりや、風の次の日、そうでなくてもお天気
のいい日に、畑の中や花壇かだんのかげでこんなようなささらさらさ
ら云う声を聞きませんか。

「おい。ベッコ。そこん処とこをも少しよくならして呉くれ。いいとも
さ。おいおい。ここへ植えるのはすずめのかたびらじゃない、す
ずめのてつぽうだよ。そうそう。どっちもすずめなもんだからつ
い間違まちがえてね。ハッハッハ。よう。ビチュコ。おい。ビチュコ、
そこの穴うめて呉れ。いいかい。そら、投げるよ。ようし来た。
ああ、しまった。さあひっぱって呉れ。よいしょ。」

底本..「新編 銀河鉄道の夜」新潮文庫、新潮社

一九八九（平成元）年六月一五日発行

一九九四（平成六）年六月五日一三刷

入力..土屋隆

校正.. noriko saito

二〇〇五年五月八日作成

青空文庫作成ファイル..

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫(<http://www.a>
で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティア
アの皆さんです。